

ジッド作品における日記を書く女たち：『狭き門』 のアリサと『女の学校』のエヴリーヌ

小坂, 美樹
大谷大学：非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/1563578>

出版情報：Stella. 34, pp.319-331, 2015-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：



ジッド作品における日記を書く女たち

——『狭き門』のアリサと『女の学校』のエヴリーヌ——

小 坂 美 樹

アンドレ・ジッドによる作品は往々にして1人称で語られ、大半が登場人物の日記という体裁をとる。処女作『アンドレ・ワルテルの手記』(1891)、『パリュード』(1895)、『田園交響楽』(1919)、『女の学校』(1929)では、主人公＝語り手(ワルテル、語り手、牧師、エヴリーヌ)の日記がそれぞれの物語全体を占める。また、『狭き門』(1909)のアリサや『贖金つかい』(1926)のエドゥアールのように、登場人物の日記が物語に組み込まれている作品もある。人の内面は現実には他者には見通せないにもかかわらず、3人称小説において「彼は……と思った」といった言い回しが多用される慣習に疑念を覚えたジッドは、『贖金つかい』の3人称の語りではそうした表現を自らに禁じた。彼は小説家の「度をこえた慧眼ぶり」について「同業の御仁よ、いったい何をご存じなのか」と揶揄し、さらにこう続ける――

だから、私は […] 私のレシのほとんどを1人称においた。たしかに日記でも(アリサの日記や『田園交響楽』の牧師の日記、『贖金つかい』の叔父の日記などにおいても)誠実さは疑いの余地がないとは言えまい、だが方法はより巧妙なので、読者をそこに招き入れることができる。読者は書き手と「共謀する」のだ。¹⁾

ジッドの時代、日記体小説はもはや新しいものではなかった。にもかかわらず日記形式による語りを、小説家としてのデビューから晩年に至るまで採用しつづけたジッドの「執拗さ insistance」²⁾は注目に値するであろう。実際ジッドによる日記形式の使用頻度・作品数は、仏文学史において他の作家を圧倒している³⁾。「日記とその形式なくしては、ジッドの人生とは言わないまでも、彼の作品は理解できない」⁴⁾というアラン・ジラルールの見解はジッド自身の日記にかんするものだが、彼の虚構の日記にも充分当てはまるのだ⁵⁾。

ジッド作品の特徴をなす「作中人物の日記」は、形式も内容もさまざまではあるものの、書き手の属性については一定の傾向を容易に抽出できる。日記を認める登場人物の大半は裕福で教養の高い男性「小説家」である。ただしアン・ドレ・ワルテルは小説『アラン』の完成には至っていないし、『田園交響楽』は牧師の日記である。つまり「知識、富裕、小説家」という属性はあくまでも細部を無視したうえでの分類ではあるが、これはまさにジッド自身の属性でもある。むろん、こうした属性に該当しない日記の書き手も存在する。『狭き門』のアリサならびに『女の学校』のエヴリーヌである。ジッドの作品で女性が語り手となるのはきわめて稀だが、その数少ない例外をなすアリサとエヴリーヌが両者ともに日記をつける設定となっているのだ⁶⁾。ジッドの創り出す女性は類型化することができ、そこには作家の実人生を取り巻く女性たちの反映が指摘されてきた。その意味でアリサとエヴリーヌは必ずしも同じタイプに分類できないが、物語論的な視点に立つならば、日記を書く、言い換えれば「語り手となる」という、他のヒロインにはない特権的な機能を彼女たちは共有している。小論では『狭き門』と『女の学校』の女主人公による日記を他の作品における男性の日記とそれぞれ比較・考察することで、ジッドのヒロイン像にかんし従来とは異なる新たな解釈の切り口を提示したい。

日記を書く女たち

日記という手段を与えられ、ジッド作品の中で例外的に語り手となったアリサとエヴリーヌ。両者とも魅力的なヒロインではあるが、それぞれの造型にはジッドの周辺にいた女性たちが別個にかかわっている。

周知のように『狭き門』はジッドの自伝的要素を色濃く宿す作品である。ヒロインには作家の妻マドレーヌの人物像が投影されているだけでなく、アリサの日記には、ジッドと結婚前のマドレーヌの日記からそのまま引き写された箇所も少なくない⁷⁾。一方、『女の学校』執筆時のジッドの周囲には、友人の妻であったマリア・ヴァン・リセルベルグとその娘エリザベート（1923年にジッドとの間に女兒をもうける）を始めとする進歩的な女性たちがおり、エヴリーヌやその娘ジュヌヴィエーヴには彼女たちの人物像が投影されている⁸⁾。したがってアリサとエヴリーヌの違いは、マドレーヌとの関係の深浅となろう。

しかし造型モデルとのつながりという観点を離れば、ふたりのヒロインの

共通項は多い。彼女たちはいずれも、裕福な家庭に育ち、繊細で、賢明な女性として物語に登場する。いずれもジッド好みの「あきらめた女 *résignées*」⁹⁾であり、物語の結末において絶望のなか若くして死ぬという「犠牲にされた女 *femme sacrifiée*」¹⁰⁾でもある。さらに両者とも小説家ではない。彼女たちが書くのは小説ではなく日記であり、その私的な領域に彼女たちの声は記録されていくのである。

『狭き門』においてアリサの日記は、主人公ジェロームによる回想の後、つまり最終章とエピローグ的補足部分との間に、ちょうどひとつの章を構成するかのよう配置されている。彼女の日記には、ジェロームの回想からは窺い知れない、地上と天上の愛に引き裂かれる女性の苦悩が刻まれている。他方、『女の学校』は全編がエヴリーヌの日記からなり、愛の「結晶解体作用 *décristallisation*」¹¹⁾の記録となっている。前半（第1部）では、婚約者ロベールを心から尊敬するエヴリーヌが、愛の喜びを無邪気に書き綴る。20年後に再開された日記（第2部）では、妻となり2児の母となったエヴリーヌが、かつて愛したロベールの偽善的なふるまいを日記中で告発する。そこでは、もはや夫との生活は耐えられず家を出るしかないと思いつめるエヴリーヌの様子が切迫感をもって記されていく。このように内容の異なる彼女たちの日記ではあるが、他作品の男性による日記と比較すると、女性による日記に固有の特徴が浮かび上がってくる。

日記体小説

日記体小説は1人称小説のサブジャンルに属し¹²⁾、現実の日記を形式のうえで模倣する。「日記 *journal intime*」は、「さまざまな形式から解放され、生の動きに従い、あらゆる自由を享受し、思考も夢もフィクションも、自己について語ることも、重要ないしは些末な出来事について語ることも、すべてが可能であり、秩序も無秩序も好みのまま」¹³⁾である。こうした極端なまでに自由なエクリチュールを模倣する日記体小説の定義は容易ではない。そもそも内容については「私的 *intime*」であることのみが適当な定義であろう。ただし日記による語りは、あらゆる形式から解放されているわけではなく、むしろ制約は多い。日記による語りの特徴を（他の隣接ジャンル、特に書簡による語りとの比較において）定義すると、本物の日記と同様、1人称での「私」語り、「日々」

の記述, (「私」以外の) 読み手の不在などが挙げられる¹⁴⁾。本論で扱うアリサとエヴリーヌの日記も, 他のジッドの日記体小説も, たしかにこの定義を逸脱するものではない。とはいえ, 日記体小説があくまでフィクションである点は留意しよう。日記の真の書き手は作者であり, 彼は登場人物の名を借り, 読者を念頭におきつつ, テキストすなわち小説を書くのだから¹⁵⁾。

日記の始めと終わり

現実の日記では何をどのように綴ってもよいのと同様, いつ始めるのかも書き手の自由に任されている。日記の終わりについては必ずしも書き手の自由になるわけではないが, その方法に規定はない。だが日記体小説においては, 作中人物が日記をつけ始め, 書き続け, そして終わる理由を, 作者は説得的な仕方では提示する, あるいは提示しないといった創作上の判断に迫られる¹⁶⁾。実際アリサとエヴリーヌの日記には, なぜ日記を始めるのかが明記され, また日記が終わることについても共通の意識が読み取れる。まず両者それぞれが日記を書くきっかけを比較しよう。

アリサの日記は次のように始まる――

エーグ・ヴィーヴ

おとといル・アーヴルを発って, きとうニームに着いた。私の初めての旅! 家のことや食事のことなど, 何も気にしなくてよいので, 少し手持ちぶさた。188*年5月24日の今日, 私の25歳の誕生日に日記をつけ始める――気晴らしというほどではないけれど, ちょっとした道連れとして。[PE, 891]¹⁷⁾

フィクションでは往々にして書き手たちが「他者とのコミュニケーションがとれない」という危機的状況に置かれ, それが日記を書くきっかけとなる¹⁸⁾。ところが, アリサの日記の冒頭を読むかぎり, そのような様子は窺えない。たしかに, この引用に続く箇所では彼女は見知らぬ土地に来て生まれて初めて孤独を感じていると記してはいる。アリサの日記が「pour la première fois de ma vie peut-être, je me sens seule」[PE, 891] で始まり, 最後「je suis seule」[PE, 906] で閉じられることから, 孤独はアリサの日記を貫くテーマであることは疑えない。しかし冒頭に記された, 豊かな自然のなかで感じる「孤独」をアリサはむしろ驚きをもって受け入れようとしており, 死の直前, 白い壁だけに囲まれた救いのない「孤独」とは性質が異なっている。彼女の日記が次第

にジェロームと神との間で引き裂かれる魂の悲劇を映し出すことを考えれば、「手持ちぶさた」や「気晴らし」といういかにも軽い語が示すように、冒頭部に悲壮感はない。

他方、エヴリーヌの日記はもう少し複雑である。彼女の日記は婚約者ロベールに宛てた手紙のように始まる――

1894 年 10 月 7 日

ロベール、

まるであなたに向かって書いているようです。[……] もし私があなたより先に死ぬことになれば、[……] あなたは私が今書いている文章を読むのでしょうか。この日記を残せるのなら、あなたから完全に離れるのではないような気がします。[EF, 587]¹⁹⁾

エヴリーヌの日記はロベールの提案により始められる。フィアンセたちはそれぞれが「ふたりの物語 *notre histoire*」[EF, 589] を日記に記録し、いつか先に死んだ者が残った者に日記を託す約束をする。アリサの日記が見知らぬ土地での孤独を契機としているのに対して、エヴリーヌの日記は自宅で婚約者に宛てた手紙のように始まる。彼女たちが日記をつけだすきっかけは一見正反對だが、アリサの日記が旅行という外的な理由で始められていたのと同様、エヴリーヌの日記も他者（婚約者ロベール）からの提案を発端としており、彼女自身の内的問題が原因となっているわけではない。アリサの日記もエヴリーヌのそれも、行き場のない苦悩が綴られていくだけに、両者の執筆の動機は、むしろ読者の期待の地平を裏切るものと言ってよい。さらにふたりの日記には、冒頭において同じ語が使われている。アリサの日記でもエヴリーヌの日記第 2 部でも最初に登場するのは「手持ちぶさた *désœuvrement*」の語である――

アルカション、1914 年 7 月 2 日

この日記帳を取り出したのは、刺繍を持ち出すようなもので、療養中の手持ちぶさたを埋めるためだ。でも、日記を再開するからといっても、ああ、もうそれはロベールのためではない。[……] 私が書くのは、自分の考えを少し整理するため、自分をはっきりと見つめるため [……] [EF, 613]

「自分を見つめる」という動機を再開の理由にするエヴリーヌの日記は、彼女自身の 20 年前の日記とも、アリサの日記とも異なっている。しかし重要なのはこうした違いにもかかわらず、彼女たちの日記に対する姿勢が相同な点である。ふたりは書く理由を「手持ちぶさた」と表現し、これから書く内容が決して重

要なものでないことを示唆しているのだ。もちろん男性登場人物が書く日記においても執筆の動機が示されないわけではない。『田園交響楽』の冒頭で牧師は、雪に閉ざされた生活の「暇 *loisirs*」²⁰⁾を利用してジェルトリュードの魂の記録を書くと言っている。「暇」という語にアリサやエヴリーヌがもちいた「手持ちぶさた」との共通点を見い出せるが、彼女たちが書く前からすでに日記を過小評価するのに対し、牧師の方は「かかる仕事を私に託した神に称えあれ」²¹⁾と記し、自らの日記に重要な意義を与えている。そもそもアンドレ・ワルテルにせよ、『パリュード』の語り手にせよ、あるいはエドゥアールにしても、日記を始めるきっかけについては特に言及していない。この点からジッドの小説世界においては、女性と男性では日記の動機に明白に異なる設定が与えられていると考えられよう。小説家でもなく、手紙を書くわけでもない女性の登場人物を日記へと向かわせる場合、ジッドはそのきっかけをあくまで些末なものにしているのだ。彼は女性たちを謙虚な語り手とすることで、彼女等の日記を正当化するのである。

また、日記の終わりにかんしても女性による日記は、男性の場合とは異なる方法が採られている。現実における日記の終了には、書き手の（怠惰も含めた）意志、あるいは何らかの不可抗力がかかわってくるが、そのさいに日記を終える理由について、わざわざ記述する必要はない。しかし虚構の日記においては、物語には必ず（物理的な）終わりがあるのだから、登場人物の日記をいかに終えるかは、慎重に扱うべき創作上の問題となる。ジッド作品の場合、特に女性登場人物による日記は書き手の死でもって終わる。日記を書く登場人物のうち、アンドレ・ワルテル、アリサ、エヴリーヌの3人が物語の結末でこの世を去り、当然そこで日記の記述も途切れる。もちろん他の日記の書き手（男性）たちが物語の完結後も日記を続けるかどうかは作中で明言されてはいない。しかしながら『パリュード』の語り手の日記は、「*J'écris Paludes.*」²²⁾に代わって「*J'écris Polders.*」²³⁾が繰り返されながら続くであろうし、エドゥアールの日記は、彼の『贗金つかい』の執筆が継続するかぎり終わらないであろう。『田園交響楽』の牧師の日記はジェルトリュードの死により存在理由を失うが、牧師は死ぬわけではない。男性の書き手はアンドレ・ワルテルを例外として（それぞれ状況は異なるとはいえ）生き続けるのに対し、女性の書き手は絶望的な孤独のうちに最期を迎える。ジッド作品に登場するヒロインはことごとく死を与えられるが、

語りの特権をもつアリサやエヴリーヌも同様にそうした犠牲者に数えるべきなのだろうか。この問いに答えるために、彼女たちの死とそれにとまなう日記の譲渡について検討しよう。

日記の宛先

前述のように、日記は「書き手以外の読み手の不在」が前提となる。己について自ら書き記し、自分のみが読むという閉じられた場であるからこそ、日記では内面の吐露が可能となる。ジッドが日記形式の語りを好んだのも、それが登場人物の内面を表現する「誠実」な方法と考えていたからだ。

アリサもエヴリーヌも、日記をあくまで自分のものとして始めている。前者は日記を「自己完成 *perfectionnement*」[PE, 893] のために、後者は「自分をはっきりと見つめるため」に書く。たしかにエヴリーヌが日記をつけ始めたのは、いつの日かロベールに読ませるためであった。しかし日記の冒頭(第1部)にあるように、日記が読まれる条件は彼女自身の死であり、書き始めた時点で(彼女が夫より先に死ぬことの)確証はなく、実感は伴っていない。彼女たちの日記が「自分のもの」から「誰かのもの」へと変化するの、それぞれが自らの確実な死を意識したときなのである。

アリサはジェロームとの訣別後、家出同然にパリへ向かい、療養所で息を引き取る。彼女は「この世の生活にはもう何ひとつ望まず」[PE, 904]、体が衰弱するまに死を願う。彼女の日記の最後の日付は10月16日。その3日前にアリサは次のように記す――

この日記を火に投げ込もうとした時、何か警告のようなものを感じてやめた。もうこれは私のものではない。私にはジェロームからこれを取り上げる権利はない。この日記はただ彼のために書いてきたのかもしれない。[PE, 905]

迫りくる死の予感を前に、アリサは自分の日記をジェロームのものとする。彼女は日記が死後確実に彼の手に渡るよう、自ら公証人を介して手配する。ジェロームに届けられた日記が「封印された封筒」[PE, 890]に入っていたという細部は、アリサの強固な意志を思わせる。他方エヴリーヌの場合、日記中で想定される読み手はひとりに限らない。彼女はまず遠い将来の死という不確実な条件においてロベールを読み手として考える(第1部)。第2部で彼女は、自身

の日記が子供たちに読まれることを期待する――

いつか子供たちがこの日記を読むことになれば、私のふるまいが正しかったこと、少なくともその理由を分かってほしいと思う。[EF, 613-614]

この段階ではまだエヴリーヌにとって自らの死は切迫したものではない。夫とはもう一緒に暮らせない、家を出たいという彼女の思いは、ロベール本人や周囲の無理解のためになかなか実現しない。最後にエヴリーヌが取った手段は、伝染病患者の介護という命懸けの仕事であった。ついに彼女は切迫する死を意識する。その日記は次のように終わっている――

可愛いジュヌヴィエーヴ。[……] 私は彼女を愛している。私はここに娘のために書いておく。もし私が戻ってこれなければ、彼女にこの日記帳を託そう……。 [EF, 643]

エヴリーヌがアリサのように日記を娘に遺すべく手筈を整えたかは、作中で詳らかにされていない。しかし娘が母親の日記を確実に手にしたことは、物語冒頭に置かれ序文として機能するジュヌヴィエーヴの手紙が示している。

アリサもエヴリーヌもごく私的な理由で始めた日記を、迫りくる死を前に他者に託す決心をする。日記に閉じ込められた彼女たちの声は、手紙のように宛先をもち、自ら望んだ相手へと伝わるのである。ここに一種のコミュニケーションが生まれるわけだが、その必要条件は皮肉にも書き手たちの死であった。男性登場人物の場合、大半は死なず、彼らの日記が他者に委ねられることはない。彼らの日記はその性質を何ら変えることなく続くのである²⁴⁾。

アリサとエヴリーヌの日記は、いずれも近い他者（従弟ジェローム、夫ロベール）との関係が軸となっている。日記の内容はまったく異なるものの、日記を書くという他者への働きかけとしては消極的な行為をとおして、ふたりは彼らから離れ、最終的に日記を託す相手を指定し、死を選ぶに至る。こうした日記のあり方は、ジッドの小説において女性が書く日記特有のものである。

死者の声としての日記

回想形式の語り手は、自らの語る過去の出来事について成り行きも結末も知っており、いわば時間的に距離を置くことで、良くも悪くも「落ち着いて」語ることができる。同じ1人称による語りであっても日記形式の叙述には、こ

うした対象との距離は望めない。したがって、「日々書かれる」日記の語り手は自身が渦中にあるにあって記録する事件がいかなる結末を迎えるのかを知らない。日記形式の物語では語り手と読者は情報量の点で同じなのである。読者は語り手の紡ぐ物語を読み進めながら、出来事の生成や推移を追体験する。『狭き門』でも『女の学校』でも読者はアリサとエヴリーヌの日記を読み、彼女等の感情の起伏に寄り添い、その最終的な決断に向かい合う。死を選ぶという否定的な結末を納得するか否かは読者個人に委ねられよう。しかしながら読者は書き手の死という結末に驚くことはない。なぜなら日記が物語に導入される以前に、すでに別の人物によって予め彼女たちの死が報告されているからである。日記が明らかにするのは物語の結末ではなく、そこに至るまでの過程なのだ。

『狭き門』は主人公＝語り手ジェロームによる回想形式の物語である。彼は冒頭で自分の語り手としての態度を消極的なかたちで宣言する――

他の人なら、これを一冊の本にまとめることもできただろう。しかし私はここに語ろうとする物語を生きるためにすべての力を注ぎ込み、精魂尽き果ててしまった。だから、私はただ覚えていることだけを記そうと思う。[PE, 811]

ジェロームは語り手としての非力を自覚しているが、少なくとも彼は「語る」ことができる。他方、「語られる」アリサが彼の語りの現在においてどのような状況にあるのかは、追想が進んでもいっこうに判然としない。彼の回想録執筆よりもはるか以前（10年以上前）に、彼女がすでに死んでいることは追憶の最後（第8章）でようやく明らかになる。アリサの妹ジュリエットから姉の死を伝える手紙を受け取ったジェロームは、それを書き写した後でアリサの日記を導入する。日記から伝わってくる声は生々しいが、しかしそれはあくまで死者のものとして提示されるのである。

エヴリーヌの日記もアリサの場合と同様、読者はそれを読む前に書き手の死について知らされる。彼女の日記を導入するのは娘のジュヌヴィエーヴであり、母親の日記の出版を某氏に手紙で依頼する――

1928年8月1日

拝啓

ずいぶんと迷いましたが、これらのノートをお送りする決意をいたしました。母が私に残した日記をタイプで打ち直したものでございます。母は1916年10月12日、X病院にて亡くなりました。亡くなるまでの5カ月間、その病院で母は伝染病患者の

介護をしていたのです。[…] [EF, 585]

この書簡が、全編エヴリーヌの日記からなる『女の学校』では序文の役割を果たす。やはりここでも10年以上の歳月が娘の手紙（1928年）とエヴリーヌの死（1916年）との間に設定されている。

日記を書く作中人物もそれを読む読者も物語の結末を知らぬからこそ、日記形式の小説では前者に対する後者の感情移入を生みやすい。こうした創作上の効果を考慮すれば、日記の導入に先立ち読者に書き手の死を示すことはあまり得策ではないだろう。だが、ジッドにとって女性の登場人物に語らせるためには、日記という手段が不可欠だったのであり、なによりも彼女たちの日記は死者の声として提示されねばならなかったのである。

*

ジッド作品においてヒロインは皆ことごとく死ぬ。彼女等の死は、大半の場合、主人公（男性）が自己を確立するための条件であり、時にそれは解放とも解釈できる²⁵⁾。あるいは主人公（男性）が「彼の話 his tale」²⁶⁾をするためには、女性は死ななければならないとの分析も可能である。

たしかにアリサの死なくしてジェロームの回想は成り立つまい。とはいえ、死者の声として表れる彼女の日記は、本当に彼の語りを導いたと言えるのだろうか。ジェロームはアリサの日記の直前に次のように記す――

公証人から届いた封印された封筒にはアリサの日記が入っていた。私はここに、その多くのページを書き写す。注釈はつけない。私がそれを読みながら胸に抱いたさまざまな思いと、とても言葉にはならない心の動揺については、これを読む方々が十分にご想像くださることと思う。[PE, 890]

ジェロームは物語冒頭から非力な語り手であった。そしてアリサの日記を前にして彼は語り手としての役割を放棄する。すなわち日記が彼の語りにとって代わるのである。

エヴリーヌの場合も、真の意味で「彼女の物語」を紡いだのは夫のロベールではなく、ジュヌヴィエーヴである。『女の学校』3部作において最初に「私」という言葉を発する、つまり語り手となるのは彼女なのだから。

ジッド作品において例外的に語り手となった、言い換えれば「私の話」をすることのできたアリサとエヴリーヌも、その特権の対価は死にほかならなかった。他のヒロインと同様、彼女たちも逝ってしまうが、しかし両者は物語世界からただ単に姿を消したわけではない。いずれも死に際し日記を他の人物に託すことで真の語り手へと変貌する。しかも「死者の声」として導入されたふたりの日記は、一種の遺言としての力を持つ。アリサの日記はジェロームの語りにとって代わり、彼による物語を相対化した。またエヴリーヌの声は物語全体を支配し、娘ジュヌヴィエーヴの物語を導く役割を果たす。そしてついに後者はジッドの小説世界にあってまったく異例にも、作中で死を免れた唯一通りの女性の語り手となるのである。

註

- 1) André GIDE, *Ainsi soit-il ou Les jeux sont faits*, in *Souvenirs et voyages*. Édition présentée, établie et annotée par Pierre MASSON avec la collaboration de Daniel DUROSAY et Martine SAGAERT, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2001, p. 1016.
- 2) Jean-Yves TADIÉ, *Le Roman au XX^e siècle*, Paris : Pierre Belfond, 1990, p. 15.
- 3) フランス文学における日記体小説を一望するために以下の著作を参照した。前2著はフランス文学を扱い、後3著は欧米さらには日本を含めたより広い範囲を研究対象としている。それぞれ日記体小説の定義、具体的には作品の一部が日記形式のものを採用するか否かといった点などで相違があるので、挙げられた作品は必ずしも同一ではない。しかしいずれにおいても、ジッドはフランス文学史上最も頻繁に日記形式をもちいた作家のひとりである。Voir Yasusuke OURA, «Étude sur le roman journal français», *Études de langue et littérature françaises*, n° 52, Société japonaise de langue et littérature françaises, 1988, pp. 116-117 ; Valerie RAOUL, *The French Fictional Journal : Fictional Narcissism / Narcissistic Fiction*, Toronto / Buffalo / London : University of Toronto Press, 1980, pp. 114-116 ; H. Porter ABBOTT, *Diary Fiction : Writing as action*, Ithaca / London : Cornell University Press, 1984, pp. 209-222 ; Lorna MARTENS, *The Diary Novel*, Cambridge : Cambridge University Press, 1985, pp. 282-286 ; Trevor FIELD, *Form and Function in the Diary Novel*, Totowa : Barnes & Noble Books, 1989, pp. 187-191.
- 4) Alain GIRARD, *Le journal intime*, Paris : PUF, 1963, p. 91.
- 5) 日記体小説の網羅的研究は、フランスよりもアングロサクソン系の国々に多い。ジッ

ドの場合、個々の作品を日記形式であることから分析した研究は多数あるものの、日記形式の語りを全体として取り上げたものはあまり見当たらない。1996年にペンシルベニア大学に提出された Dorrie Lai NANG による博士論文 *Gender and the Diary Novels of André Gide* は、タイトルからも明かなように、ジェンダーの観点からジッドの日記体小説を考察したものだが、そこでは主人公の日記が作品全体を占める4作品『アンドレ・ワルテルの手記』『パリュード』『田園交響楽』『女の学校』に対象をしばっている。

- 6) ジッド作品において語り手となった女性登場人物はもうひとりいる。エヴリーヌの娘ジュヌヴィエーヴは、『女の学校』3部作の最後『ジュヌヴィエーヴあるいは未完の告白』の語り手である。だがジュヌヴィエーヴは日記を書いていない。
- 7) アリサの日記とマドレーヌの日記の比較は、文字通りの引き写し部分の多さと同時に、フィクションとノンフィクションの差異を明らかにする。作家の生み出したヒロインの日記と、作家の妻の日記の違いについては、以下の論文を参照—— Michel LIOURE, «Le Journal d'Alissa dans *La Porte étroite*», *Information littéraire*, n° 16, 1964, pp. 39-45; Anny WYNCHANK, «*La Porte étroite* et Le Journal de Madeleine», *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 42, avril 1979, pp. 41-49. また筆者も以下の拙論で、2つの日記の比較からジッドの創作のあり方を示した——「『狭き門』のアリサの日記——マドレーヌの日記から移された箇所について——」, *Gallia*, 第46号, 大阪大学フランス語フランス文学会, 2007年3月, 17-24頁。
- 8) Voir Emily S. APTER, «La nouvelle *Nouvelle Héloïse* d'André Gide: *Geneviève* et le féminisme anglais», in *André Gide et l'Angleterre*. Actes du colloque de Londres 22-24 novembre 1985 édités par Patrick POLLARD, London: Birkbeck College, 1986, pp. 95-99.
- 9) Voir André GIDE, *Journal I, 1887-1925*. Édition établie, présentée et annotée par Éric MARTY, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1996, p. 573.
- 10) Voir Alain GOULET, «Permanence et enjeu du motif de la femme sacrifiée», in *André Gide et la réécriture*, Lyon: Presses universitaires de Lyon, 2013, pp. 213-224.
- 11) André GIDE, *Journal des Faux-Monnayeurs*, in *Romans et récits. Œuvres lyriques et dramatiques*, vol. II (abrégé ensuite: RR2). Édition publiée sous la direction de Pierre MASSON, avec, pour ce volume, la collaboration de Jean CLAUDE, Céline DHÉRIN, Alain GOULET et David H. WALKER, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2009, p. 531. ジッドは『贋金つかい』で愛の結晶解体作用を描こうとしたが、このテーマが全面的に取り上げられたのは『女の学校』である。
- 12) Gerald PRINCE, «The Diary Novel: Notes for the definition of a sub-genre», *Neophilologus*, n° 59, octobre 1975, pp. 477-481.
- 13) Maurice BLANCHOT, «Le journal intime et le récit», dans *Le livre à venir*, Paris: Gallimard, 1959, coll. «Folio / Essais», p. 252. ブランショはさらに続けて、きわめ

て自由な日記が唯一契約を結んでいるのが、「カレンダーを遵守すべし」という「恐るべき条項」であると述べている。

- 14) Yasusuke OURA, *art. cité*, p. 103. フランス語原文は以下のとおり—— «l'emploi de la première personne “je”, la notation “au jour le jour” et l'absence de destinataire.»
- 15) Valerie RAOUL, *op. cit.*, p. 3.
- 16) *Ibid.*, p. 27.
- 17) André GIDE, *La Porte étroite*, in *Romans et récits. Œuvres lyriques et dramatiques*, vol. I (abrégé ensuite : *RRI*). Édition publiée sous la direction de Pierre MASSON, avec, pour ce volume, la collaboration de Jean CLAUDE, Allain GOULET, David H. WALKER et Jean-Michel WITTMANN, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2009, p. 891.『狭き門』『女の学校』のいずれにもテキストはプレイアッド版をもちい、各引用末尾の括弧内 [] に作品名の略号 *PE*, *EF* と頁数を示す。日本語訳は既訳を参考にしたうえでの拙訳。
- 18) Valerie RAOUL, *op. cit.*, p. 29.
- 19) André GIDE, *L'École des femmes*, dans *RR2*, p. 587.
- 20) André GIDE, *La Symphonie pastorale*, dans *RR2*, p. 3.
- 21) *Idem.*
- 22) André GIDE, *Paludes*, dans *RRI*, p. 261 et al.
- 23) *Ibid.*, p. 313.
- 24) 『アンドレ・ワルテルの手記』のワルテルは、迫りくる狂気と死を前に友人ピエール・C に日記の公表を依頼する。死を意識して日記を他者に渡すという点では、アリサやエヴリーヌと共通するが、ワルテルが望んだのは、特定のひとりに読まれることではなく、公刊であった。
- 25) Voir Alain GOULET, *art. cité*.
- 26) Naomi SEGAL, «Parfois j'ai peur que ce que j'ai supprimé ne se venge» — Gide and women», *Paragraph*, vol. 8, octobre 1986, p. 62.